



Vol. 107

CONTENTS

【コラム】高等教育現場におけるクラウドサービスの活用…関谷 貴之

今号は小特集掲載のため、『べた語義』解説・『情報の授業をしよう』・『集まれ!ジュニア会員!!』は休載となります

COLUMN

高等教育現場における クラウドサービスの活用



非常勤講師として、大学1、2年生向けの情報リテラシーと初等プログラミングの科目を担当している。「授業で不明な点があれば電子メールで質問するように」と学生に伝えてきたが、彼らにとっての連絡手段は99%がLINEで、メールを用いる学生は年々減っている。一教員として、学生にとって使いやすい連絡手段を用意したいものの、余計な手間はかけたくない。学期が終われば連絡をとらないのだから、学生とLINEの交換などしたくない。私よりもむしろ学生の方が嫌だろう。

そこで2018年度からは、Slack^{☆1}で授業用のワークスペースを作成して、学期が終わったら削除することにした。プログラムのソースコードやエラー発生時のスクリーンショットを、一般的なメーラよりも簡単に送ることができ、電子メールよりも便利である。お蔭で学生とのやりとりは密になったように感じる。

一方本務校では、メール、Web、端末などのサービスを学内に提供する情報基盤センターに勤務している。電子メールについていえば、十分な容量のストレージ、迷惑メールへの対策、学内組織が独自メールアドレスで運用可能な管理機能等々を提供するために、オンプレミス^{☆2}でのメールサービスの維持にかかるコストは増大している。SNSの普及などで、以前よりは電子メールの重要性は減っているものの、大学がメールアドレスを提供するのをやめることはできそうもない。そこで2020年3月よりG Suite for Education^{☆3}のG-Mailをカスタマイズして、オンプレミスと同程度のメールサービスを提供している。Googleのサービス関連技術に明るい教職員(私ではない)のお蔭である。

さて、このように高等教育現場における情報サービスの利用者としても提供者としてもクラウドサービスに依存している。今後は、目的に合わせて適切なクラウドサービスを選択して、上手に活用する能力が更に求められるのだろう。加えて新型コロナウイルス感染症対策である。本務校では、大学全体としてオンライン授業を実施することになったが、Zoom^{☆4}などの遠隔会議・講義のためのクラウドサービスがなければ実施は不可能である。もちろん、そのサービスを活用する教職員・学生の多大な努力も不可欠である。このコラムが掲載される頃には、一体どのような状況になっているのか、不安でもあり楽しみでもある。

関谷貴之(東京大学情報基盤センター)

☆1 <https://slack.com>

☆2 情報システムを構成する機器を自組織(ここでは大学内)に置く方式。外部のデータセンタに置く「クラウド」に対する用語。

☆3 <https://edu.google.com/intl/ja/products/productivity-tools/>

☆4 <https://zoom.us>